

この80年、市民の暮らしの変化を考える資料を中心に約 150 点を展示します。

なお、新たに確認された地域の関連資料については、80 年より遡って展示します。



■経済の発展

この 80 年間に発行された紙幣 35 点のうち、33 点を紹介します。戦後の質も悪く偽造されやすかった A 号券から、現在も作られている精巧で偽造されにくい E 号券まで並べることで、経済の発展による高額紙幣の発行、少額紙幣の貨幣への変化を紹介します。



■交通の発達



昨年暮れ東京湾アクアラインが開通して 25 年となりました。今は東京までバスを使えば 1 時間余りで行くことができるようになりましたが、木更津市が生まれた昭和 17(1942)年はどうだったのでしょうか。

昭和 19(1944)年 12 月の房総西線（今の JR 内房線）の時刻表を見ますと、両国駅までで 2 時間前後。今の倍近い時間がかかりました。また、終戦とともに運行本数は限られ、計画されていた列車も突然運休となったりしました。

ここでは、鉄道の開業以前、汽船の就航にまで遡って、開業時や終戦後の時刻表などを展示し、交通の発達に関する資料を展示します。

■軍都木更津と戦後の混乱

昭和 11(1936)年、木更津海軍航空隊が発足し、昭和 16(1941)年に飛行機の修理と補給を行う第二海軍航空廠が設置されたことから、関連会社など軍と関わる人が多くなり、「軍都木更津」と呼ばれていました。

敗戦とともに占領下での生活が始まりましたが、物資や食物を自由に買うことができない配給制は継続されたままで、風紀の乱れや海苔網の被害のほか、産業は低迷し、電力の 3 分の 1 がアメリカ軍に消費されるなど、苦しい生活が続きました。

ここでは、戦中の防空に関する資料や戦時国債、配給切符などを展示します。



■人口の増加と生活の向上

終戦直後は、兵士の帰還や都市からの縁故疎開者などで、木更津市の人口は増加しました。それに反し、農家の働き手を失ったり、肥料などの不足もあり、木更津市は昭和 21(1946)年の米の供出割当を確保できませんでした。

高度成長期に入り、昭和 40(1965)年、現在の君津市に八幡製鉄（今の日本製鉄）が操業すると、従業員とその家族の住宅を確保する必要があり、畑沢・清見台などが宅地造成され、人口は昭和 45(1970)年に 7 万人台、翌年には 8 万人台、翌々年には 9 万人台と順調に増加しました。

ここでは、全国的な統計を用いて、家庭用電化製品が普及した様子をお伝えします。